

書 評

Jean-Claude Larchet:

La divinisation de l'homme selon Saint Maxime le Confesseur

Les éd. Du CERF, Paris, 1996, pp.764

大 森 正 樹

著者ラルシェは近年精力的にマクシモス（以下、Max. と略記）やその他のギリシア教父の研究書を発表し、ギリシア教父の観点から現代的諸問題にも光を当てる試みをしている学者である。本書はMax. の「人間神化」に関する研究書であるが、何しろ700頁を超える大著なので、興味深いと思われるいくつかの点に的を絞って書評の責を塞ぎたい。

本書は以下のような内容になっている。まず序論ではMax. の生涯や彼のキリスト論論争を概観した後、人間神化のMax. 以前の様々の教説を紹介し、これはギリシアのオルフェウス教以来の関心事で、ネオプラトニズムにより理論として先鋭化したことを述べる。つまり人間神化の説は神の人間化の内的論理に呼应し、これがネオプラトニズムに親しんだギリシア教父のうちで開花したのである。当然Max. にあっても神化は重要な概念である。にもかかわらずそれについての研究は少ない。Max. の神化についての考えを解明することはギリシア教父全体の神化説の解明であり、ひいてはまたMax. の影響を大いに受けた後代のバラマス理解にも繋がっていくものである。そこで以下各章では次のような内容で考察が進められる。第1章「神の計画としての神化」、第2章「神化の人間学的基礎」、第3章「神化の不首尾（原罪の問題）」、第4～6章「神化のキリスト論的基礎（神化の前提としての救い、キリストの人性の神化、キリストの人性の神化と人間神化の関係）」、第7章「神化の聖霊論的基礎」、第8章

「神化の教会論・秘跡論的基礎」、第9章「神化の修徳と観想の基礎」、第10章「神化の神学的諸条件」、第11章「神化の過程とその本性」、第12章「神化の初穂と将来の完成」。

さて人間神化はキリストの受肉が前提となったものではあるが、それは神の遠大な計画であり、人間の救いと深く結びついている。つまり受肉そのものが墮罪に対する神の配慮だからである。その上、人間は神の像として造られ、知恵を授けられており、神と人間以外の被造物の仲介的存在である。だから人間の務めは被造物全体が神の意志に応答することを実現させることであって、その意味で人間神化は被造物全体の神化の端緒となるべきものである（第1章）。

神化の人間学的基礎（第2章）においては、まず「人間本性のロゴス」が問題とされるが、このロゴスはもともと神のうちに胚胎し、人間がそのロゴスに従って、つまりは神の意志に従ってより完全な存在になるべく望まれている基本のものであって、その限り人間は「神の手」から生じたものであるという考えが生まれる。それゆえこの「本性・自然のロゴス」はMax.の人間学の中心を占める概念とも言える。このようなロゴスを内にもつ人間が神へとダイナミックに上昇するとき用いる能力がヌースである。このヌースに意志が加わり、さらに、この意志がその本源の状態を保つかぎり神の意志に添うわけであるから、神化とは人間がその根源に帰還したいという深い欲求を満足させるものなのである。

またMax.にあってキリスト論論争との関連で、「本性・ピュシス」と「ヒュポスタシス」が区別されていることが指摘される。つまり「本性」は類・種に関連し、このような範疇に含まれる個々の存在に共通で、本質概念と同じであるが、ヒュポスタシスは個々のものと関連し、それは特殊・個別である。この区別は意志の地平において見出される。即ち人間に特徴的な能力に二つあり、一つは理性、他は意志である。各々の働きは推論と欲求である。Max.にとり人間は本性的に理性的な存在であり、意志は理性的欲求であって、それは知性的魂が与えられている限りの人間に属する。それゆえ自己決定の力を有し、思うがままに人は振る舞う。意志はだから人間の本性に内属する。「意志すること」もこの本性に属する。しかしここで「単に意志する」というのと「いか様に意志する」ことは区別され、前者は本性的なるものだが、後者は意志作用を様々の局面においていかに使うかにかかわるので、ヒュポスタシスに属するのである。このように意志の行使のヒュポスタティックな様態がプロアイレシス

と関連する。このように人間のもつ自由意志をMax. は了解しようとする。

人間の自由意志の行為は原罪の問題とつながるが（第3章）、Max. はアダムは存在したと同時に罪を犯したと言う。この人祖の罪は人間が自ら神に成ろうとする空しい誘惑に負けたことによる。古の義人は神化されたかという問題について、Max. はやや否定的な見解に傾くが、しかし義人たちは徳行をなして、観想や靈的認識の高度の段階に達し、不完全な仕方ではあるが神化と呼応すると言う。

ところで人間神化はキリストが受肉したということにその根拠を置くが、受肉した御言葉による人間本性の救いの様態に二つある（第4章）。一つは、御言葉は人間本性をその全体において引き受けたばかりではなく、神が原初にアダムをそのように造ったところの人間本性も全体として引き受けた。また御言葉は原罪によって失墜したままの人間本性を、そしてわれわれと同じ本性を罪なくして引き受けた。しかも御言葉によって引き受けられた肉は、キリストの神性と協働するもので、それが失墜した人間性を回復させる。つまり受肉は自然本性を浄化し、神と無縁なものを廃止し、取り除くのである。こうして人間本性を根本的に刷新し、原罪以前の状態に戻すが、他方、御言葉の神性はそれがヒュポスタシ的に結合している限りにおいて、人間本性にかかわり、御言葉の人性は同じく神の本性とかかわる、という一大革新がなされる。

神化の前提は救いということだが、人間が神化されるというのは神の御言葉とのヒュポスタシ的結合による（第5章）。受肉は人間本性と御言葉の神性の間に内密な接触を築くことにより、人間本性は神化されるが、これはいわば神化の自然理論とも言うべきものと関係する。しかし神化された人間の本性は人間の本性でなくなってしまうのではなく、保持されるのであって、本性が改変されたり、別物になるのではない。むしろ人間本性としてそれは却って堅固になるのである。

またMax. によれば、人間の神化の基礎は御言葉のヒュポスタシにおける人性の神化による（第6章）。神の計画によるとアダムは御言葉の受肉なしに、御言葉によって直接に神化されるはずであった。それは旧約の義人の例に見た通りだとMax. は言う。そして御言葉の人性の神化は人間性全体に、つまりすべての人間に及ぶ。即ち御言葉はわれわれの本性を救い、神化する。御言葉は個々の人間がそうであるような、既に個別化された人性をとったのではない。人性をとったとき、御言葉のヒュポスタシが共通の人性に具体的な個としての性格を与える。すなわちキリストの人性は人間のヒュポスタシをもつのではなく、御言葉の神的ヒュポスタシのうちにそのあ

りかをもつ（エンヒュポスタトス）のである。

神化は神の一方的恵みではあるが、この恵みが人間のうちに働くためには、人間の側からの努力（神と人との協働）が必要である（第9章）。恵みは受ける側の信と個人的努力に比例する。そのために情念の浄化などの修徳実践（プラクシス）が必要となる。しかしこの行為は何よりも愛から出たものでなければならない。この行為に次いで必要なのは観想（テオリア）であり、これは人が神にまで上昇し、栄光から栄光へと変容していく一つの段階である。またこれによって人は一種の霊的グノーシスを獲得していく。

第三の霊的生の段階はテオロギアである（第10章）。テオロギアは感覚や理性にまつわるすべてを投げうつのみならず、可感的なものや可知的なものへのヌースの働きをも拒絶する、超自然的な段階である。それは全くの受動の状態になって、神の啓けを全面的に受け取るためなのである。そしてここに神の光が働く。神の光は神に関する超越的認識が可能になる場で、ヌースそのものが神を識るに相応しいものに変容される。光は神のエネルゲイアの発現なのである。この考えは確かにパラマスに影響を与えている。

また神秘体験の脱魂状態についても（第11章）、Max. は、ヌースは神を見るために自らのうちにとどまり、ただそれが浄められる必要があると説くエヴァグリオスと異なり、自らより出ていくことが必要であると考えの限りにおいて、ディオニュシオスに近づく。神秘家に働く神のエネルゲイアは唯一のものであると Max. は言って、単一エネルゲイア論者 monoenergiste という批判を得たが、神化された人間はその人間的能力や意思はそのままとどまり、人間の自由は保全される、従って、人間はあくまで人間としてとどまりながらも、神に成っていくとして Max. への不幸な批判を著者はかわそうとする。

ともあれ Max. の真意はどこにあるのか、それについては尚多くの研究を要することであろう。しかしこれまでの幾多の研究成果を踏まえて、Max. の思想の正しい位置づけを、しかも彼にとり非常に重要な概念であった人間神化のそれに照準を定めながら試みる本書は大変意義深いものと思われる。特に Max. の思想について、ましてやその神化説についてはほとんど理解され、知られていない我が国においては、Max. 研究の必読書ともなろうし、人間学研究の分野でも大きな示唆を与えてくれよう。